

浅野 誠 著

『授業のワザ一挙公開』を読む

亀谷 和史

本書は、かつて話題になった『大学の授業を変える16章』（一九九四年、大月書店）の続編であり、筆者の大学教員生活三十年の総決算ともいえる書である。専門が教育方法学・生活指導論ということもあって、大学教育実践でのテクニク、具体的な授業のワザ、ノウハウが詳しく紹介され、日々の講義・ゼミの授業実践を見直すうえで大変参考になる本である。

第一部では、大学での授業改善に向けての基本的なスタンスと原理がまとめられている。偏差値システムからの脱却、すなわち大学教育モデルをブランド大学に求める従来の発想構図からの「卒業」、学生を学習主体に育てていく方法論の必要性と、学生の授業参加の追求、そして、それに向けての授業改善の三段階（授業内容改善、説明提示方法の改善、学生の活動改善）が順に検討されて

いく。

第二部では、日頃私達が苦勞している授業の具体的対処法が丁寧に展開されていて、今後の講義やゼミの改善の指針にしうる内容が随所にちりばめられている。たとえば、「授業改善スタート五か条」、「人間関係をつくるワザ」、セルフエステイムを高めるワザ、自己紹介・他者発見ビンゴゲーム」、「討論成立のワザ」〜六」など。

また第三部では、大学教育実践研究の動向や今日の課題にも言及してあり、この分野での今後の展望にも学べる本である。これに加えて、「私の大学教師史一〜四」ほか十のコラムから、筆者の教員経歴と実践経験の深化が紹介されていて、興味深く読める工夫がなされている。

今、一人ひとりの多様な価値観や生き方に応じた教育の転換が求められている。大学教

育改革もその一環に位置づけられる時代の要請である。大学全入時代を迎え、一人ひとりの学生に「付加価値」をつけて実社会に送り出すための社会的機能を担うように切に求められている。時代の変化に応じて大学もリニューアルされなければならない。その意味で本書は、エリート主義的な大学教育論を克服し、学生とともに歩む授業を創造し展開するための実践的指針を提供してくれている。

しかし、何百人もの学生を対象にするマスプロの私立大学で、真にオリジナルな研究を持続しつつ、講義やゼミを七、八種類も担当して、著書のような誠実な教育実践を追究することは至難の技である。著者も自らの年間労働時間を算出しているが、教育時間、会議・実務時間、社会的活動を含む研究時間をあわせると総計二千三百時間になるという。本書は、大学での教育実践の技術的なノウハウのみならず、大学教員の教育労働（条件）はいかにあるべきかという視点からも、深く考えさせてくれる書である。ぜひ一読されることをお勧めする。

かめたに・かずふみ

日本福祉大学・社会福祉学部